

当惑しつつも

ロナルド・E・D・ホームズ

過去六つの大陸のうち五つの大陸を旅したがそのなかで日本が一番多く訪れた国だ。最初に日本を訪れたのは二〇年前のこと。外務省の招きによるもので二週間にわたり六つの県をまわる楽しい旅であった。だが、本当の日本を知るには短すぎた。

二年後、今度は研究フェローシップを得て日本に滞在した。バブル崩壊の影響がはつきり現れていた時期であった。すでに連立政権になっており、日本は安全な国との認識は悲惨な事件によって破られた。サリンガスによるテロが霞ヶ関で起こったのだ。霞ヶ関は当時、官僚とのインタビュのために私も頻繁に通っていた場所だった。わたしはすんでのところを難を免れた。

一九九五年の二度目の滞在から頻繁に短い滞在を重ねたが、私が真にこの不可解な日本の社会に夢中にさせられたのは最近の一五カ月間にわたる滞在中のことだ。この期間中、私は日本を北から南まで、北海道から九州まで旅をした。まだ訪

問していない島々があるものの、また春の一番よい季節をのがしはしたものの、この国の人と文化をより深く垣間見ることができた。

最近の滞在で私は新たな体験をした。日本列島一二〇キロをドライブしたことである。途中、シンジケートのメンバーと疑われて私服の警官に呼び止められたこともある。鹿児島では古風な町並みを楽しんだ。鹿児島には私の大学(ラサール)と関係のある学校があるのだ。大阪と京都では深まり行く秋の紅葉を楽しんだ。現代の日本人作家村上春樹の回想録を読んで触発されてジョギングをはじめた。

都会を離れると日本はいかに多様かがわかる。いろいろな場所によって生活のペースが異なるということもわかった。人口が密集した都会はあまりにも非人間的である。歩を進める速さといったら誰か前にいようと横にいようと後ろにいようと構いなしの速さである。人口が密集していない地方では、人間同士が絆で結ばれていると感じる。眼と眼が合えばつながりができる。そしてつましやかにほほえみを投げかけられ頭を下げられ歓迎されているなど感じるができる。

日本を理解するため、単に観察することからさらに進んで別の方法も試みた。これまで私は、村上春樹の小説を三冊読んだ。「ノルウェーの森」、「ねじまき鳥クロニクル」、そして新作の「1Q84」である。そのほかにも彼の回顧録 What I Talk About When I Talk About Running を読んだ。村上は登場人物の人生の綿密な描写を形而上の世界に融合させることに成功している。彼の回顧録は私をジョギングへとかりたてたのであるが、そのなかのある言葉は生きてい

くうえでの価値ある助言として頭に蘇る。「感情的な傷は人間が独立するうえでの代償である。」

テレビや映画などのポピュラーな媒体によっても過去から現在にいたる日本の姿を垣間見ることができる。今は、たわいないバラエティ番組よりテレビドラマのほうが多いような気がする。昔の名画―黒沢の「用心棒」、「乱」、「影武者」や現代の新しい作品―滝田洋二郎の「おくりびと」や中島哲也の「告白」などを鑑賞することで日本映画の様式がどのようなものを把握することができる。後の二作品は異なるテーマを扱っている。「おくりびと」は日本人の敬虔な気質を取り上げており、「告白」は若者たちの倒錯した人格を描いている。

まだまだ日本について学ぶべき点が多い。この九カ月間で私は、いろいろな感情を味わった。恐れ、喜び、興奮、拒絶、恐怖。

二〇一一年三月一日東北を大地震が襲ったとき私は幸いにも近畿地方にいたのだがその二日後東京にもどったとき不安な気持ちがかみあげてきた。

長いこと日本に滞在しているフィリピン人の友達にたずねられた。私はどちらに属するのか、日本びいきかそれとも日本ざらいかと。私は即答した。私は日本ではガイジンとして扱われるけれども、また戦争の悲惨さを思い起こす場所がある一方で戦争を賛美する場所もあるのも事実であるが、そしてまだ日本語をしゃべれず、また読めない私ではあるが、自分は日本びいきのほうの一員であるといえる。日本には魅了され、誘惑され、そして当惑しつつも。

Ronald E. D. Holmes / アジア経済研究所海外客員研究員

A faculty member of political science at De La Salle University Manila and President and Managing Fellow of Pulse Asia Inc.